

江戸川大学国立公園研究所から

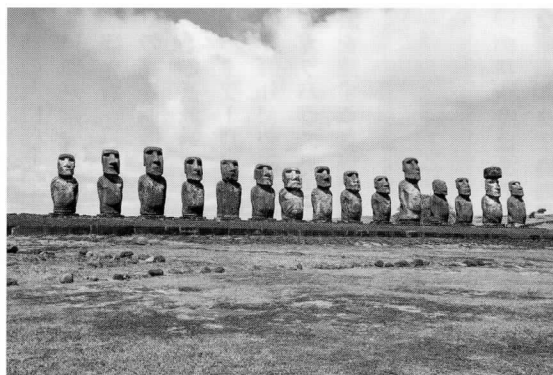
執筆担当・親泊素子

イースター島の始まり

イースター島は南米チリ政府領有の島で、チリ本土から太平洋へ西に約三、七〇〇km沖に浮かぶ絶海の孤島である。正式名称はチリ共和国自治区バスクア島だ。面積は一六三・六km²で、日本の宮古島よりやや広い。マグマの噴出によってできた火山島で、海拔五〇七・四mのテレバカ火山、四一〇mのポイケ火山、三三四mのラノ・カウ火山の三つの火山と七〇の小さなクレターがある。この島に人が住みはじめた時期や、どのような移住がたどり着いたのかについては諸説あり、西暦四〇〇年ごろに東ポリネシアあたりから来たのではないかと、考古学的記録から七〇〇年から八〇〇年ごろだろうとも言われているが、未だにはっきりした答えは出ていない。

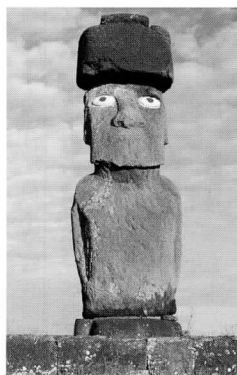
モアイ像について

この島はポリネシア人が来るまでは巨大なヤシが生い茂る亜熱帯雨林の島だった。やがて島に移住してきたポリネシア人がアフという石の祭壇を作り、祖先崇拝を行っていたが、徐々に部族の守り神としてモアイ像が作られ始めた。やがてアフの上にモアイ像が建てられるようになり、一三〇〇年ごろ、最初の王となったホツ・マツア王がやってくるとモアイ像はさらに多く作られるようになった。一六〇〇年ごろになると頭の上にブカオという帽子のようなものをのせたモアイ像が作られ始め、やがて巨大なモアイが部族間で競い合って作られていった。モアイの材料は島南部のラノ・ララクという小高い丘の採石場の火山凝灰岩から切り取られ、島の各地へ運ば



イースター島のモアイ像

れたと言われている。その際に多くの木材が伐採され、森林の大量減少を招く結果となった。やがて、島のあちこちに集落ができ、部族抗争が始まった。部族の守り神であるモアイ像を倒すことが、その部族に勝利することだったことからモアイ倒しの戦争が始まった。一七〇〇年ごろになると、島の人口が増加し、一時期は九、〇〇〇人近くまでなったと言われ、森林資源がさらに減少し始め、食糧難にも陥り、やがてモアイ像は作られなくなってしまう。この島の森林消滅の原因が、このモアイ



白珊瑚の目が入ったモアイ

西洋文明の侵入

イ作りと部族抗争による自然破壊説と、島にもち込まれたネズミによる説とがある。さらに、西洋人の侵略によって、疫病がもたらされ、島民が奴隷として島外に連れ出されたために、イースター島の文明が崩壊したという説もあり、これもはっきりした答えは出ていない。島には現在一、〇〇〇体近いモアイ像があるが、立ち並ぶモアイ像は、近年倒れていたものを建て直したものである。多くのモアイ像は村を見守るように内陸に向かつて立っているが、七体のモアイ像は海に面している。

イースター島を最初に発見した西洋人はオランダ人探検家のヤコブ・ロッゲフェーンで、島を発見した日が一七三二年の復活祭の日だったために、この島をイースター島

と名付けた。当時の人口は七、〇〇〇人と推測された。その後一七七〇年にスペインのドン・フェリペ・ゴンザレスが来航し、この島をスペイン領とすることを宣言した。

一七七四年にはイギリス人探検家のジェームズ・クックが来島し、島のモアイが倒されているのを見て、島内で争いが起こっていることを知った。一八二二年にペルーがスペインから独立すると、ペルー政府は島民の半数近い一、五〇〇人を奴隷として連れ出した。やがて戻ってきた島民が天然痘や結核などの疫病を島にもち込んだため、島の人口が急激に減少し、一八七七年にはわずか一一一人となってしまう。一八七九年から一八八三年にかけて、チリはポリビア・ペルーの連合軍と天然資源を巡る戦争に勝利し、チリは周辺の島々への勢力を拡大したが、遠く離れたイースター島には関心がなかった。しかし、太平洋地域で植民地競争を繰り広げていたイギリスが、ライバルのフランスを牽制するためにこの島の領有をチリにもちかけた。そこで一八八八年にチリ海軍のポリカルポ・トロ大佐が島を訪れ、島の代表者のアタム・テケナと協

議した結果、島の主権が譲渡され、正式にチリ共和国に併合されたが、スペイン語とラパ・ヌイ語に訳された締結内容には大きな隔たりがあった。

ラパ・ヌイ国立公園の設立

チリ政府は一九三五年に島の四％の土地を国立公園に指定した。公園内にはアフやモアイ像、ラノ・ララク採石場等の考古学的遺跡や貴重な生態系等が存在していたが、チリ政府の主たる関心は牧羊による経済的利益であった。既に英国の羊毛会社にリースしていた土地に国立公園の境界線が引かれたのだが、第一の目的は大規模な牧羊であり、同時に国立公園設立はチリ政府の領有を島民に再認識させるものであった。従って、国立公園内には七万頭近い羊が放牧され、その羊の盗難を防止するため、ラパ・ヌイの住民は島の一角のハンガ・ロアの町に追いやられた。英国企業による国立公園内の大規模な牧羊は一九五二年まで続けられたが、一九五三年からはチリ海軍が管理した。しかしチリ海軍の統治に反対する住民の暴動が起こり、

牧羊のための農場のリースは廃止され、地域住民の自治も認められるようになった。やがて、ノルウェーやアメリカ等の海外の考古学者等がモアイ像の調査研究とともに、その復旧に力を貸すようになった。一九九五年にラパ・ヌイ国立公園がユネスコの世界文化遺産に登録されると観光地として着目され始め、多くの観光客が訪れるようになった。また、二〇一八年に国立公園の土地が先住民に返還され、現在では公園の管理はマウ・ヘヌアコミニティに任されており、年間一五万六、〇〇〇人近い観光客が訪れる公園となっている。また、現在の島の人口は七、七五〇人（二〇二四年）だが、そのうちの約七五％が観光業に従事するようになり、その売り上げは約一億二千万ドルに上ると言われている。現在、オーバーツーリズムの対策に頭を痛めており、公園の入園料の値上げやガラバゴス島のように高い入島料を課すこと等が検討されている。

おわりに

チリ政府はこのモアイ像で有名なイースター島の売却を日本にも

ちかけた経緯がある。一九三七年六月上旬のことなので、ラパ・ヌイ国立公園が設立されて間もない時期である。チリ政府はこの売却を英国や米国にも打診をしたと外務省に伝えたために、日本政府はしばらく静観することとし、最終的に日本は購入しなかった。もし、この島を日本が購入していたならば、日本の国立公園の歴史にラパ・ヌイ国立公園の名前が追加されていたにちがいない。

参考文献：

Keller, P. (2001). Easter Island's Rapa Nui National Park: Fragile Tie Between Past and Present. https://www.icwa.org/uploads>2015/10/PDF_UNESCO_World_Heritage_Center_https://whc.unesco.org/list
外務省、<https://www.mofa.go.jp>.

親泊 素子 ●おやどまり もとこ

米ウイスコンシン大学大学院博士課程修了。国立公園協会研究センター長等を経て、一九九八年江戸川大学教授。二〇一七年から江戸川大学国立公園研究所客員教授。環境政治学専攻。